



東京部会(第149回)記録

日時: 2026年4月18日(土) 15:00~17:00

場所: 慶應義塾大学三田キャンパス 北館1階会議室2

参加者: 25名(会場10名、zoom15名)

1. 「篠原先生の経済単元提案を中学校で実践してみた」(さいたま市立白幡中学校 市川慶太先生)の報告があった。

2025年の「先生のための夏の経済教室」での同志社大学名誉教授の篠原聡一先生が「経済授業の目次を組み替える」という題でご講演された。その講演を踏まえて、中学校3年生の社会科公民的分野の「私たちの経済」の単元を組み替えて、全14時間の授業実践を行った。経済を「私たちの暮らしをみんなで支え合う社会の仕組み」と定義して、単元全体で考える問いを「私たちの行動は、経済をどう変えるのか。一自分とみんなの人生と経済との関連性と役割とは?」と設定した。

授業のコンセプトとして、従来の「消費→生産→政府」の順序で学ぶ教科書の構成をやめ、代表的な事例を取り上げて、そこで関係する知識や内容、概念を取り上げた授業展開にした。また、多様なキャリアプランと学習内容を連動させて、現実社会で直面する問題に対して、経済の知識や考え方を使得って解決できることを意図して構成した。さらに、前単元である政治単元とのつながりや、生徒の肌感覚でつかめるような理解を促す授業構成をした。

授業実践を行った成果として、経済の本質だけで授業展開を行ったことにより、授業時数を大きく縮小できたこと、事例中心に、有機的に結び付けて学習したことで、知識のネットワーク化を促したこと、経済における政府の重要性を認識させられたことが挙げられた。課題としては、新しい経済用語が予備知識として必要になることなどが挙げられた。

質疑では、まず、市場の役割の提示の仕方や捉えさせたい概念の伝え方について質問があり、サプライチェーンを取り上げ、販売に至るまでにあらゆる売買が行われていることを伝えることで、市場の役割を伝えるとともに、「分業と交換」や「つながり」の概念を捉えさせることができた。現在のコストプッシュインフレについても捉えさせることにつながった。

次に、電気や水道の事業について扱う際に、授業者が「自由化」と「民営化」の違いや運営とインフラの上下分離について理解した上で、生徒に教えることの必要性について議論された。

最後に、経済の学習を行う前提でも、政府が基本的なルール(所有権や度量衡など)を定める重要な役割があることを捉えさせる必要があることについてどのように扱ったかという質問があり、中学校段階では、憲法や政治の学習でルールについて扱っているので、前単元との関連性を捉えながら授業を行う必要性について議論された。

本発表は、夏休み経済教室の発表につながることから、発表に向けて、本授業を受けた生徒がどのように理解したかがわかるデータを提示することの必要性が確認された。

2. 「世界史探究における金融経済教育の工夫」(土浦日本大学中等教育学校 根本太一郎先生)の報告があった。

歴史的な事象をより一層深めるために、基本的な知識や概念を習得した上で、複数の視点から事象を見つめ、社会構造の多面的・多角的な考察から問題点を見出したり、現代と共通する諸課題の共通点や差異を把握したりできるようにする。そのために、歴史的な事象を「金融」「経済」の視点から考察し、社会構造の深い理解につなげ、



生徒が捉えた歴史を「ナラティブに語る」ことを目指した授業を行った。

授業実践の具体例として、高校2年生の世界史探究の3学期末の実践「大交易・大交流の時代」全13時間のうち、一部が紹介された。

1時間は、大航海時代による世界の一体化について、Mrs GREEN APPLEの「コロンブス」のPVが「炎上」してしまった原因を話し合わせた上で、大航海時代の経過とアジアへの影響について具体的に把握させた。金融経済教育との視点では、ポルトガルとスペインの競争、香辛料の産地が東南アジア(モルッカ諸島など)に限られること、マラッカでの交易の結節点、江戸時代の日本の貿易体制への影響を理解させた。

もう1時間は、新大陸発見による現在への影響を捉えさせた。最初にブラジルで行われたCOP30や現在残されているセネガルのゴレ島やコロンビアのカルタヘナの港と要塞といった「負の世界遺産」を取り上げて、スペインやポルトガルによる植民地支配の進展を学ばせた。金融経済教育との関連では、「新大陸発見」により、アメリカ先住民の社会への影響、銀の総量が増えて価格革命が起きたこと、植民地経営によりヨーロッパに豊富な商品がもたらされたことを理解させた。

現在の社会課題の根底にあるものは近代化に起因するものが多いため、社会構造や経済活動の背景を捉えさせる上で、金融・経済の視点から歴史的事象を考察することが有用であった。

質疑応答では、まず、金融の側面の授業展開に関する質問について、銀が決済手段として使われるようになり、世界の中での決済が活発になったことを取り上げたことが述べられた。また、生徒の科学的な認識とナラティブの相克について、教科書の記述の行間を考えたり、新書レベルの内容を読み取らせたりして、批判的に歴史的事象を捉える工夫をした授業を行っていることが確認された。

そして、歴史的事象を理解する上で、金融・経済を理解することの必要性や、議論の余地がある問いについての歴史学習について議論された。

関連して、歴史の授業を行う上で、授業者が、世界恐慌の背景や旧平価による金解禁の内容を理解しておく必要であること、中学校段階では、公民的分野を学習する前に歴史的分野の授業を行うことを意識して授業を行う必要があることを確認された。

篠原聡一先生から、経済的な視点から歴史を捉える場合、「何のために貿易するか」という視点から、貿易をするために必要なものや、次の時代につながったことは何かを捉えさせることが有効ではないかとご教示頂いた。

3. 『「公共」と〇〇教育 その実践の取り組みと課題』(清水書院)の紹介が中沖清水書院編集長からあった。

4. 春の経済教室の総括(千葉県立津田沼高等学校 杉田孝之先生)があった。

昨年秋から準備を行った。今後、来場者のアンケートの分析を行い、次年度以降も、現場の教員に役立ち、生徒が学習内容を理解しやすい授業につながるような経済教室にできるようにしていきたいと述べられた。

5. 夏休み経済教室について(東京証券取引所 吉村慈子さん)8月の開催のアピールと、印刷準備の関係から登壇者の配付資料の原稿締め切りが7月になるとの情報があつた。

記録 松平 裕介(八王子市立第二中学校)

次回開催予定:2026年7月4日(土)15時00分~17時00分

場所:慶応義塾大学三田キャンパス東館4Fのオープンラボ

内容:夏休み経済教室の準備、佐藤英司先生(福島大学)の実践報告など